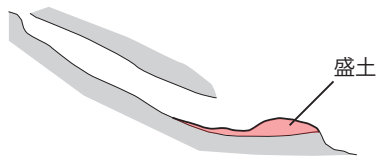


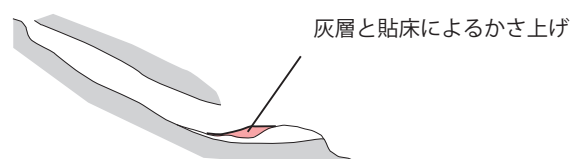
窯づくり

- 窯づくり開始
斜面をトンネル状に掘り抜き、窯をつくります

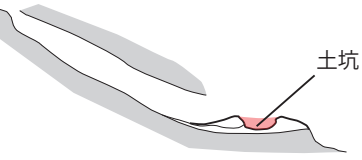


- 窯の掘削で出た土を用いて前庭部を整地します
また、前庭部後方に土を盛り上げ、土手状にしています

1 次操業

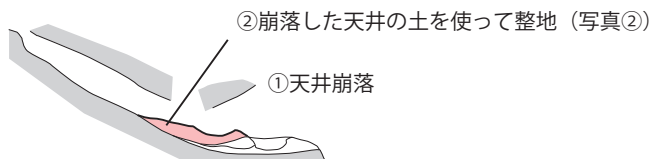


- 操業開始
少なくとも4回、須恵器を焼成したことが分かりました

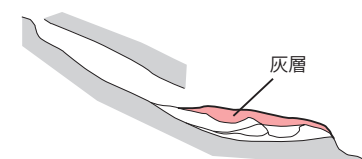


- 4回目の操業後、土坑（穴）が掘削されます。この土坑には灰と須恵器が
つまっていました（写真③）

2 次操業

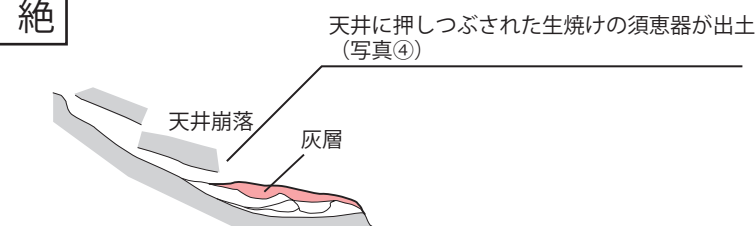


- ②崩落した天井の土を使って整地（写真②）
①天井崩落



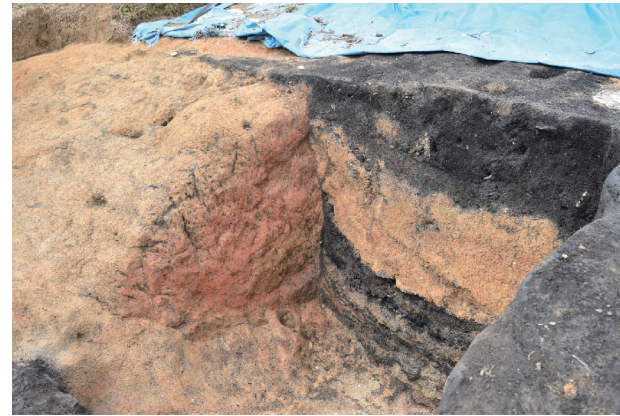
- 2次操業にともなう灰原が形成されます（写真③）

廃 絶

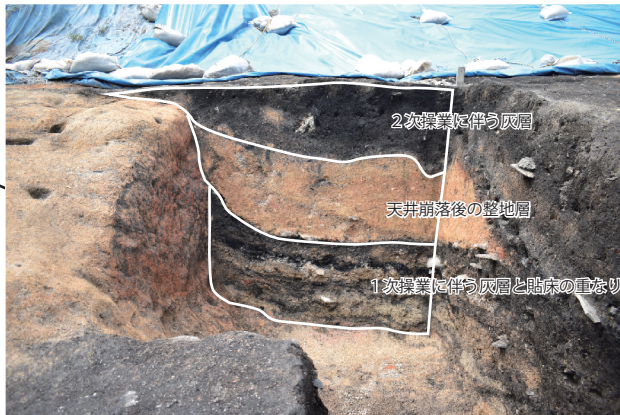


- 再びアクシデントがおそう・・・
またしても天井が崩落。須恵器工人たちもあきらめ、この窯での須恵器
生産は終わりを迎えました

第5図 3号窯跡 窯づくりから廃絶まで



写真① 当初操業時 燃烧部
（壁面が火を受けて赤く変色しています）



写真② 燃烧部の堆積状況（窯の左半分のみ掘り下
げています）



写真③ 燃烧部～前庭部の堆積状況



写真④ 生焼けのまま出土した須恵器

うし くび す え き かま あと

牛頸須恵器窯跡を掘る！

お だ うら
—小田浦窯跡群 | 地区確認調査の現地説明会資料—

令和5年7月29日（土）
大野城心のふるさと館

1. 牛頸須恵器窯跡とは

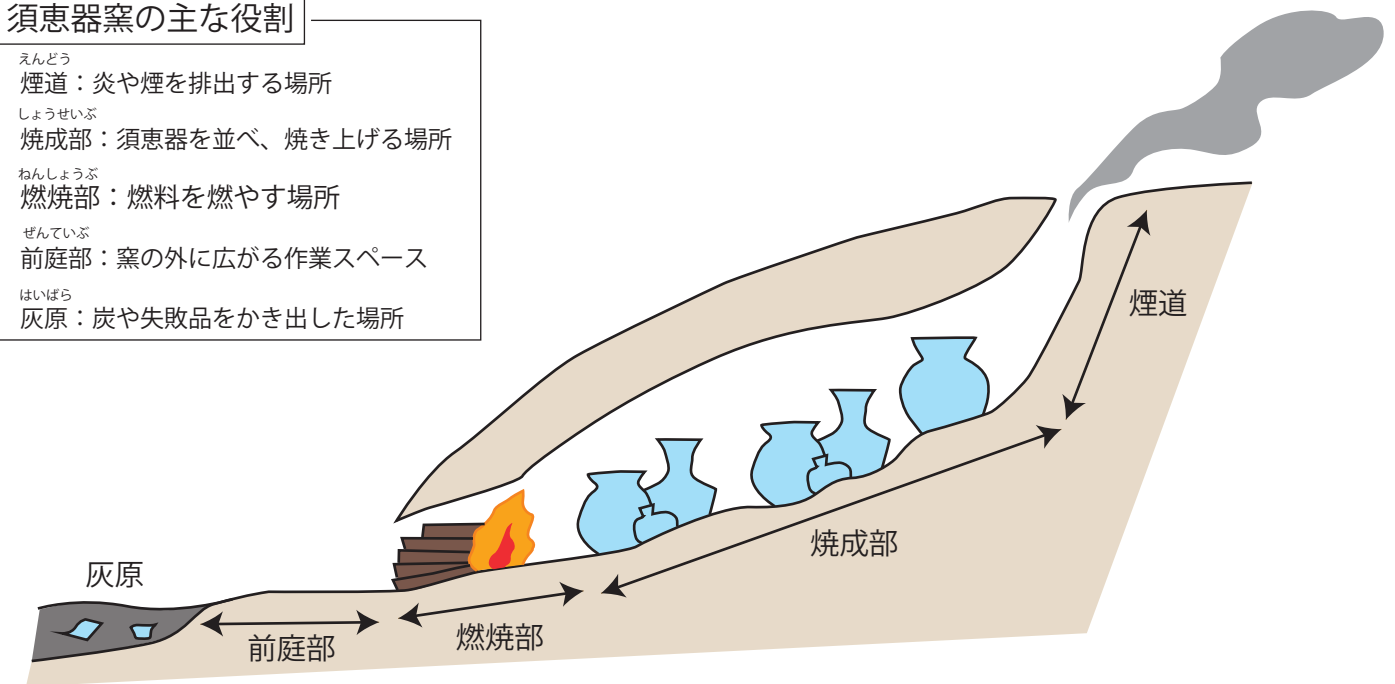
大野城市南部では、須恵器を焼いた窯跡が300基以上調査されています。
古墳時代後期から平安時代初め（6世紀中頃から9世紀中頃）の約300年にわたって須恵器の
生産を続けました。九州最大の規模を誇ることから、国の史跡に指定されています。
今回調査を実施した小田浦窯跡群 | 地区は、史跡「牛頸須恵器窯跡」の一角に位置しています。

2. 須恵器窯の構造

須恵器窯は山の斜面をトンネル状に掘り抜いてつくられており、窖窯（あながま）と呼ばれ
ます。簡易な構造ですが1200℃もの高温を生み出し、硬く丈夫な須恵器を焼き上げました。

須恵器窯の主な役割

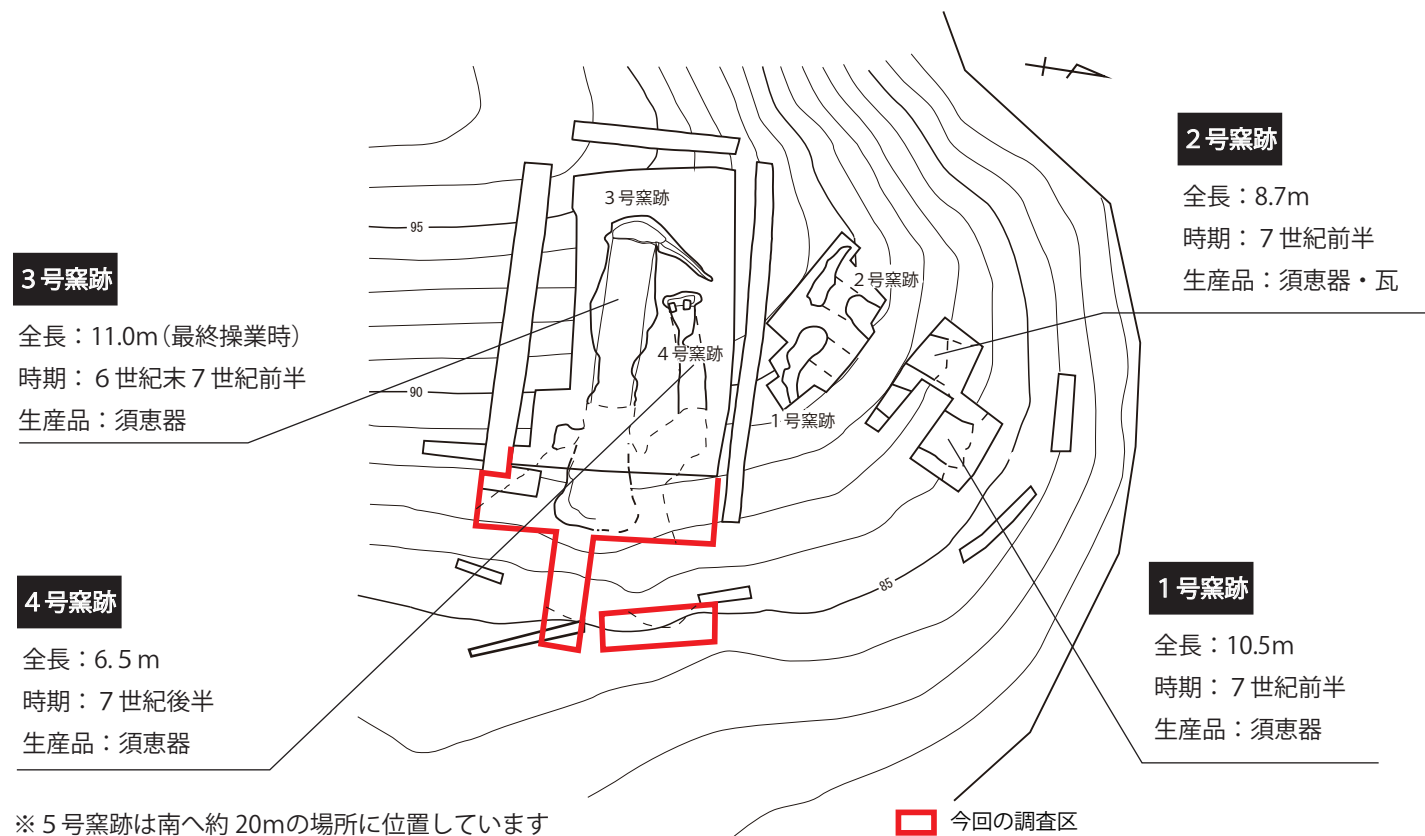
えんどう
煙道：炎や煙を排出する場所
しょうせいぶ
焼成部：須恵器を並べ、焼き上げる場所
ねんしょうぶ
燃烧部：燃料を燃やす場所
ぜんていぶ
前庭部：窯の外に広がる作業スペース
はいばら
灰原：炭や失敗品をかき出した場所



第1図 須恵器窯の仕組み（窯を横からみた図）

3. 小田浦窯跡群 | 地区の概要

平成16～17年に発掘調査を実施し、5基の窯跡を確認しました（第2図）。
6世紀末～7世紀にかけて操業されており、2号窯跡は須恵器に加えて瓦も焼いた
二刀流の窯でした（瓦陶兼業窯）。以前の調査では、3号窯跡のみ内部まで調査をおこ
なっており、操業最終段階の規模や構造が明らかになりました。



第2図 小田浦窯跡群Ⅰ地区窯跡配置図（スケール 1/400）

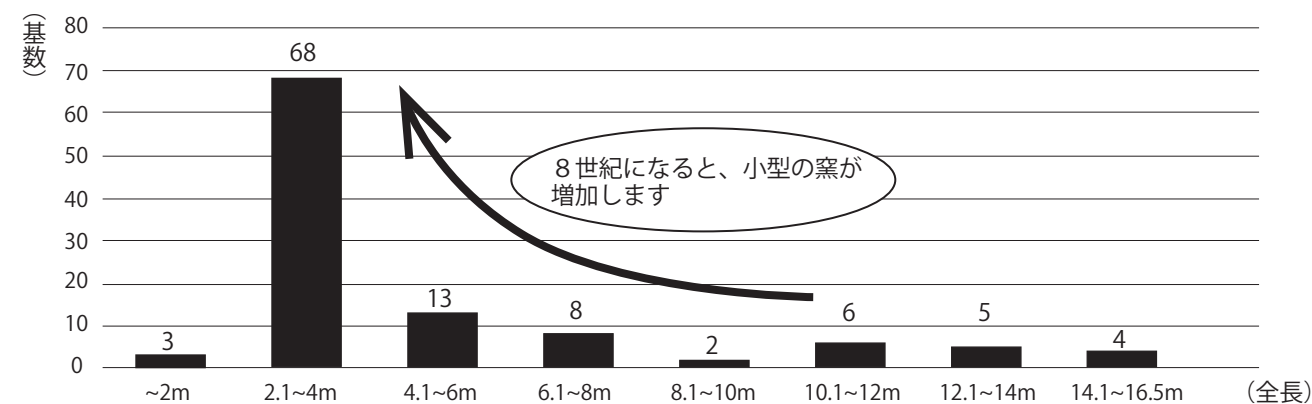
4. 調査の成果

調査の目的 3号窯跡の操業当初の規模や構造を明らかにする

成果1 最大級の窯であることが判明

3号窯跡の操業当初の燃焼部・前庭部を確認しました（第5図写真①）。その結果、操業当初は全長 14.7m、燃焼部幅は約 3 mを測り、牛頭須恵器窯跡の中でも最大級の窯であることが判明しました（第3図）。

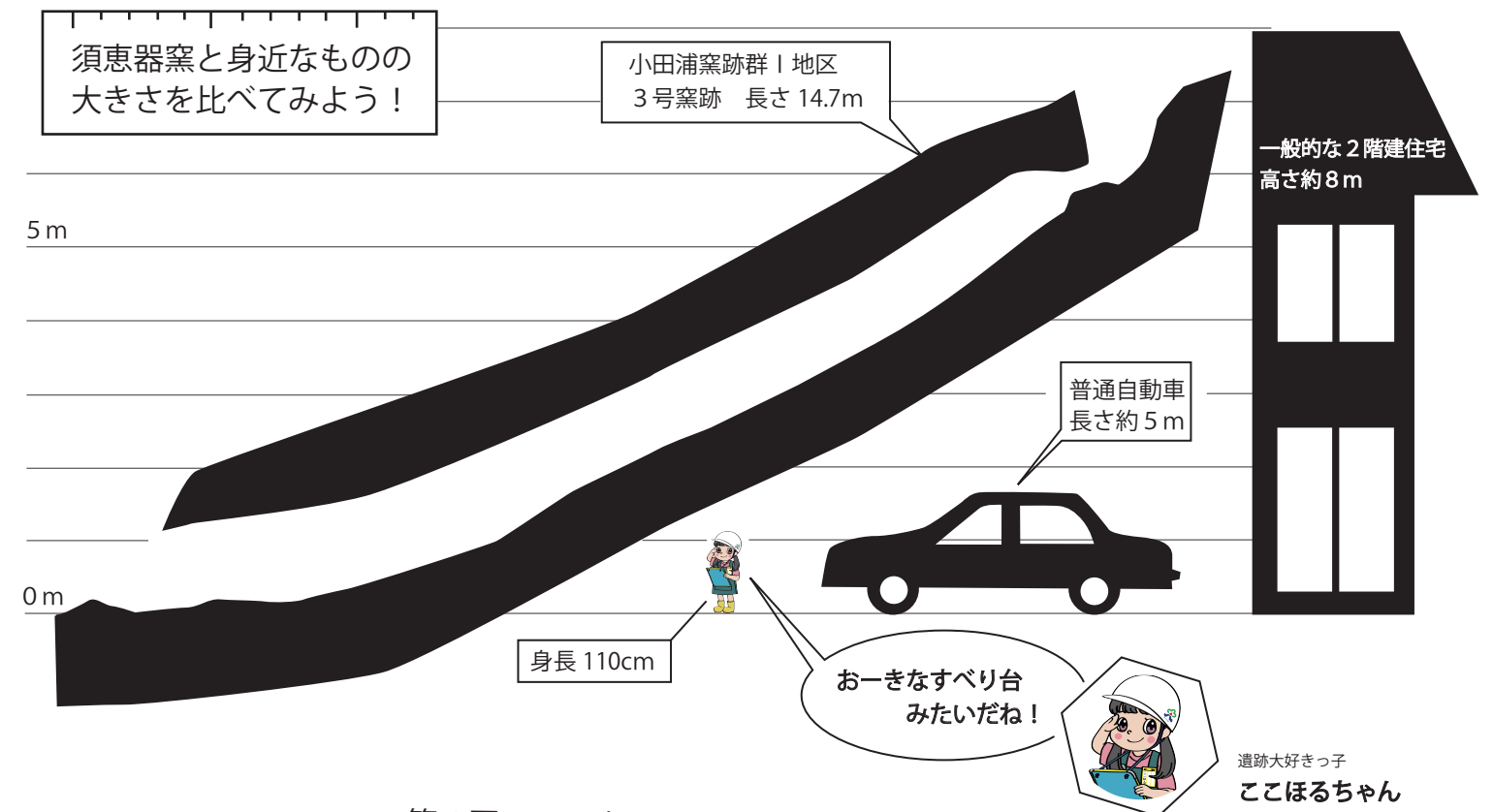
順位	名前	全長	時期
1位	小田浦 39-1 号窯跡	16.5 m	6世紀末～7世紀前半
2位	中通 B 窯跡	14.9 m	6世紀末～7世紀前半
3位	小田浦窯跡群Ⅰ地区 3号窯跡	14.7 m	6世紀末～7世紀前半



第3図 牛頭須恵器窯跡における窯の規模

なぜ大きいのか？

3号窯が操業された6世紀末～7世紀前半は、牛頭須恵器窯跡の歴史の中で窯が最も大きくなる時期です。大型の窯は、大小様々な製品を1度に大量に焼くことができました。特に1mを超える大甕は、大型の窯でしか焼くことができない特別な製品でした。



第4図 3号窯跡大きさ比較（スケール 1/100）

成果2 窯のライフサイクルが判明

第5図に示すように、窯がつくられてから使われなくなるまでの様子が明らかになりました。途中、天井が崩落してしまうというアクシデントに見舞われたようですが、窯の修理を行い、再び生産を行っていたことから、須恵器工人たちは大事に窯を使っていたようです。

5. まとめ

① 3号窯跡の操業当初の規模が明らかになりました。

全長 14.7mという大きさは、牛頭須恵器窯跡の中でも最大級であることが判明しました。

② 窯をつくる→須恵器を焼く→廃絶 という須恵器窯の操業過程が明らかになりました。

壊れた部分を補修しながら操業を続けており、須恵器工人たちの知恵と工夫、そして窯を大事に使う姿が想像できます。